

*Maria Daraki: Une religiosité sans Dieu.  
Essai sur les stoïciens d' Athènes et Saint  
Augustin,*

Éditions La Découverte, Paris, 1989, pp. 225

樋 笠 勝 士

著者 Maria Daraki は、J. Brunschwig や V. Goldschmidt らの下で古期ストイシズムをテーマにして学位を取得し、現在パリ第八大学にて古代史の教授として教鞭をとる歴史家・哲学研究者である。既に数多くの論文や単行本 (*Dionysos*, Paris, 1985) が出版されているが、本書は、著者の研究の原点に帰ってストイシズムを思想史の中で全体的に再評価しようとするものである。

さて、ヘレニズム期は、一般に混迷の時代であると言われている。例えば、資料の状況が物語る様に、それは文化・社会の混交シンクレティズムの時代なのである。この故に、ヘレニズム期の哲学はプラトンやアリストテレスとは異なる扱いを受けることになる。しかし、そこからギリシャ哲学が或る意味で貧困になったと考えるのは短絡的であろう。むしろ我々は、A. A. Long (*Hellenistic Philosophy*, 1974) も指摘する様に、この哲学を、流布している理論への批判として必然的に出現した独創的な思想と位置づけるべきなのである。この点で本書の著者も同じ立場に立ってストイシズムをとらえている。その独創性を強調するために、本書は次の様な構成をとっている。序文、I. 文明の危機、II. ストイシズムにおけるキュニコス派の遺産、III. 人間の二つの種族、IV. 心理学の誕生、V. ストア派の実存主義と称賛すべき個人、VI. 新しい神化の方法、或はストア派的認識論、VII. ストア派的経験と、世界への超脱的関与メタスタシス、VIII. ストア派的普遍主義と世界市民コスモポリタニスム、IX. 大きな逸脱、アテナイのストイシズムからアウグス

ティヌスへ。

さて、本書はそのほとんどの内容がストイシズムへの言及で占められているので、先ずストイシズムの議論を通覧することにし、次に中世哲学研究の立場から、アウグスティヌスへの論究を、いくつかの論点を抽出する仕方で紹介し、最後に以上の内容について論評することにした。

先ず著者は、アテナイのストイシズムを、自律的なポリス社会の終焉から必然的に誕生した抵抗の思想とみる立場を鮮明にする。確かに根本的な他律性の経験はヘレニズム社会全体のものではあるが、この経験から特に *religiosité* としての心情を通じて全体を再統合しようと試みたのがストイシズムなのである (p. 23)。その試みは歴史性を超える「自然への回帰」に収斂している。これを著者は、ゼノンの弟子と言われるアラトスやアリストテレス学派の歴史家ディケアルコスらのヘシオドス解釈におけるギリシャの原罪 (p. 26) から生じた懐古的心情として示すと共に、また肯定的には、徳への捷徑と言われる *βίος κυνικός* の原始的自然的神の人間像 (即ち賢者) の反映として提示する。この様な視座において、著者は古代ギリシャ思想全体のうちに占めるストイシズムの位置を比較によって浮き彫りにしようとする。こうして、始めに、ゼノンが区別した *σοφός* と *φαύλος* (SVF I. 216) を、ヘシオドス『仕事と日』の黄金種族と鉄の種族の区別に対比させ、更には前者の区別について、倫理学・認識理論・情念論・宗教・政治等の領域別に詳細なテキスト対照表を作る (p.57-62)。ここから著者は、神的な性質を有し徳を体現する *σοφός* と悪徳を備え無神論に陥る *φαύλος* の対立が「宗教的規準における善と悪の対立 (p. 64)」として描かれていることを明らかにする。次に、著者は、ストイシズムが人間精神の内面と外的表現を区別した点と、伝統的なロゴスとパトスの対立を人間の連続性 (*συνεχής*) のうちに解消した点に基づいて、心理学的体系が初めて成立したことを強調する。これもギリシャの原罪という歴史解釈がもたらした「内面化 (p. 74)」の所産と看做される。従って、様々の感情や欲望の体系化の試み (一覧表が p.82-91 にある) も、「ロゴスを時間化する (p. 75)」現実存在としての人間 (そして二分法による限り、これが *φαύλος* に相当することになる) を分析したものとなるのである。その意味で、これはヘレニズム社会の混沌によって生じた個人主義の反映であるが、他方では、「通常の人間の状況から遠ざかること (p. 99)」によって、優れて自足的な、永遠の現在に実存する個人 (*σοφός*) を登場させるための前提となる。また、「人間の連続性」は認識理論にも及ぶ。思惟と

感覚の一体性を語る Sextus Empiricus の断片は、魂による身体の支配という伝統的な心身の二元論的対立がストイシズムにおいては様々の表象に対して同意・選択してゆく魂の情態 (*διάθεσις*) という一元論的な構図に変容していることを明らかにしている (p. 132).

然しながら、一元論的人間の構図は現実存在としての個人の場で解しうるとしても、*σοφός* の場合は如何なる経験となるのか。ここで強く主張されるのは、「自然との合致」への個人的意志の発動により、結果としてあらゆる個的主体性から離れ、神聖かつ非人格的な自然の意志に身を委ねた「神なき神の人間 (p. 141)」と化した *σοφός* の様相である。この見方を支える信仰箇条は「世界より善いものはない (SVF, I, 111)」という命題である。ここに至って、ストイシズムは世界と自然の統合を提案するために社会や歴史を超越し、過去に属すポリスの概念を普遍化するのである (p. 169)。それは人間の全体的統一を回復する教育的役割をもつ、*religiosité* に満ちたものである。

然し、ストイシズムは歴史の必然としての他律性のうちで、およそそれと両立し得ない人間の現実存在に人間の再統合を要請しながら、それを実現し得なかった。回心への勧めを伴わぬエキュメニズムは極めて貴族主義的であり、崩壊してゆく古代世界の抵抗の象徴でしかなかったのである。

さて、著者によれば、ギリシャ思想はキリスト教的受容と修正を経て、ストア派的伝統とプラトンの伝統に区別される。前者はギリシャ教父 (Basilus, Iohannes Damascenus) の *matérialisme divin et spirituel* (p. 178) による「生ける神」「人間の神化」の概念に見出され、後者はアウグスティヌスに見出される。それ故、著者は基本的にはストイシズムとアウグスティヌスの思想とを対立的に扱う。この立場で著者は先ずアウグスティヌスをギリシャ思想全般と対照させ、そこから更にストイシズムと比較させてゆく。その主要な論点は以下の通りである。

1) *inter praesumptionem et confessionem* (*Conf.*, VII, ch.20) において、「自己の像を彫る」ギリシャ思想と、*identité* に直面して呻きの主体をもつアウグスティヌスの思想が決定的に区別される (p. 183)。

2) 神の発見が自己の内的空間の発見と一致する点で両者は共通しているが、発見のイニシアティヴは、一方は登高する自己 (翼をもつ魂 cf. *Phaedrus*)、他方は神 (下降する受肉の神) にある。それは「強い能動」と「強い受動」の対立である (p.190)。

3) アウグスティヌスは人間存在を肯定的・实际的に探求するが、ギリシャ思想に

においては un homme en projet が探求される。それ故、ストイシズムにおいても「連続的人間」が欲望の主体として見られる時、人間存在は否定的に扱われる。アウグスティヌスも「連続的人間」を見出すが、そのあるがままの全体としての人間を受け容れ価値づける。ただし一個の主体は神に授けられた場であると共に infelix locus である (p. 194)。

4) *φάβλος* と *massa damnata* は平行であるが、アウグスティヌスの受動性は特に、予定説・恩恵論の側面と内的悪・原罪論の側面とに二重化される。とりわけ後者は責任の主体としての人間存在を示すと同時に、心理学的には「根源的他者性 (p. 198)」をも意味している。

5) アウグスティヌスの「個人」は新しい自己を見出す *le sujet singulier* であり、*je* であるので、範型としての人間の内的目的を拒む所がある。反対にギリシヤ思想はモデル (例えば *la psychè*) を用いる。

6) アウグスティヌスは *l'être temporel* としての人間を受け容れ、*Μνημοσύνη* に人間性を与えた (*Conf.*, X, ch.8, ch.17「自己=memoria」への言及)。その時間論は時間の主観的存在性格という点でストイシズムと共通するが、後者の場合は「主体なき人間 (*σοφός*)」が示されるのに対して前者の場合は「(深淵の力によって) 物語る主体」が示される (p. 202ff)。

7) アウグスティヌスの歴史観に *progrès* の観念があるのは、この時間意識のためである。その歴史観には「曙を眺める (*Conf.*, X, ch.18)」時に神に依拠して未来 (歴史の目的) を知る *l'historicisme théologique* と、「既知の歌を唱う (*Conf.*, XI, ch.28)」時に人間に依存して未来を知る *l'historicisme laïque* がある。後者は Vico, Lessing, Herder らを取先する *l'humanité* の歴史観である。全体として、アウグスティヌスの歴史観は「希望」の源泉である。

8) ストイシズムとは反対にアウグスティヌスの普遍主義は成功した。それは *humilitas* が枢要徳にまで高められたからである。そして *la présomption païenne* と *l'humilité chrétienne* の対立図式によって表わされるストイシズムとアウグスティヌスの思想も、各々その極端な場合なのである。しかもその故に人間精神の個性や限界性という点で共通する (p. 211)。

9) 集団と個人、神的空間と世俗的空間、非人格神と人格神、*monisme* と *dualisme* などの対立概念によって見れば、ストイシズムの「自然」はアウグスティヌスにおい

て世俗化・非神聖化されることになる。ここから、神の神秘を前にして人間の理性の肥大化が進む。その結果としての現代社会において今必要なのは「世界より善いものはない」という *religiosité* の回帰である。

以上、主な論点を辿って来たが、ここで評者の限られた能力の範囲内で批評を試みたいと思う。

本書は思想史の書である。従って、ストイシズムが如何なる史的必然性を以て思想（或は宗教）として要請されたか、という点に関しては明解である。殊に、失われた *religiosité* を再建する切迫した思想運動の状況は、著者の固有の視点、即ち歴史事象を内面化・心理化する手法によってより説得的なものになっていると思われる。その点に焦点を絞るのは、恐らく理性の肥大化の象徴としての現代技術文明においてストイシズムの *religiosité* の復興を説く著者の意図があるためであろう。また、アウグスティヌスとの関係という点について言えば、いささか包括的ではあるにしても、ストイシズムの限界を超えて普遍化した思想の方向性は明白にとらえられているし、個々の *Conf.* 解釈（時間論や身体論）にもユニークな視点が見られる。

然し、概論的な論述が支配的であるという点は、思想史的立場の故に許容できるとしても幾つかの点で問題を残すと思われる。例えば、ストイシズムにおける二元論の克服という論点は最近のストア哲学研究の趨勢であり、出来ればその次の問題、即ち、なぜ *σῶμα* に一元化されるのかを、前史的詮索や起源の列挙ではなく、ストイシズムの内的必然性において論じてほしい所である。また、著者は「連続性」の概念を、ロゴスとパトス、思惟と感覚、魂と身体、などの局面の相違を超えて、歴史の流れの中で *l'homme continue* として包括的に扱っているが、その結果、相違が犠牲にされた分だけ主張が弱められているのではないかという危惧の念を抱かざるを得ない。更に、アウグスティヌス解釈においては、*Conf.* を中心に据えるのは寧ろ相応しいとしても、二重の受動性の関係、二つの *historicisme* の関係が、各々如何なる仕方で連係・対立しているのかという点についてあまり論究されていないのは問題であろう。また、世俗的自然という見方の強調は、*Conf.*, X, ch. 6, 9 の *ontological reflexion* の場面や、著者が身体への価値の表明として解釈する箇所 (*Conf.*, X, ch. 6, 8) とどのように調停されるのであろうか、といった個々のテキスト解釈についても疑問が生ずると思われる（これに加えて、幾つか引用の誤記があるのは残念である）。

然しながら、時に、事象を或る固有の視点に基づいて包括的整体的に見る視野も必

要である。本書における *religiosité* は、この点で我々にストイシズムを一層よく理解させる思想史の新しい視点となるであろう。

---

Carol Harrison:

*Beauty and Revelation in the Thought of Saint Augustin.*

Oxford Theological Monographs

Clarendon Press, Oxford, 1992, xi+289 p.

一 色 裕

アウグスティヌスが美に対して鋭い感覚をもち、しかもその思索を美について考察することから始めたのは周知のことである。しかしアウグスティヌスの美学の研究書は思いのほか少ない。本書は著者も自覚するようにスヴォボダ (1933年) とオコネル (1978年) に続く久々のアウグスティヌス美学の本格的な研究書である。本書は第1章「初期思想」、第2章「言葉・範例」、第3章「森羅万象」、第4章「人間」、第5章「受肉」、第6章「信・望・愛」の全6章からなり、前後に序論と結語が附されている。以下その内容を批判的にまとめてゆきたい。

第1章「初期思想」。アウグスティヌスにおいては理論としての *ars* と実践としての *ars* は截然と分かれたれ、魂の領域に属する前者が身体の領域に属する後者に優位し、藝術の実践は不可変の *ars* を人に想起させる限りにおいて尊重される。従って、藝術創作は不可変のものの模倣であり、そのようにして生み出されたものは不可変のものに劣る。このような考えが初期著作におけるアウグスティヌスの美と藝術の理論である。スヴォボダは彼の著作の半ば以上を費して、初期著作における以上のような「ピュタゴラス・プラトンのな美学」を描いてみせ、これを範型にして残るアウグスティヌスの著作にみられる美学への言及を記録し、その思想的源泉を明らかにした。しかし彼の研究はこの言及の記録と源泉の解明に終止し、彼自らが見出したものについて反省するところがなかった。しかもスヴォボダは哲学的反省と神学的・積義的・司牧的著作を分離し、アウグスティヌスの美の理論はもっぱら前者にあると考えていた。しかし無からの創造と受肉の教説を主軸とするキリスト教神学は、時間の領域に顕現する美により積極的な価値を見出すことを約束すると考えられる。著者のみるところ、